第74号　(50円)
昭和56年7月25日

内容

単身者主義化の中の家庭観の混迷 1
第1回大学合同セミナー…… 2
現代農村家族の周期的動態…… 4
法人ニュース…… 5
協力会員校懇談会…… 6
昭和55年度業務白書…… 7
昭和55年度大学共同セミナー白書 8
事業部だより…… 9
わたしたちの合宿……10
千人会……11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
<所在地>
東京都八王子市下柚木(〒192-03)
電話 0426-76-8511～3
振替口座 東京 5-74590番
編集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人・中川秀恭　発行人・岡山猛
製作 中央公論事業出版

単身者主義化の中の家庭観の混迷

立教大学教授
神島二郎

私は二十数年前、『近代日本の精神構造』を書く過程で、日本における個の自覚、個人主義というものに対する理解のしかたに変わったものを感じ、そこから近代日本における単身者主義とも名づくべき独特の社会構成に着目するようになった。

都会で始まる近代の新しい生活が実は田舎から出てくる男の単身者によって構成されたことは、当時の東京の人口統計に端的に表われている。しかもこれは江戸時代からあった考え方であって、鉱山の開発とか農地の開墾とか、人を集めるとき常に用いられる知恵だった。まずコストが安い。身軽だからいつでも解雇できる。そこに売春婦をおくことによって金をまきあげ、毎日働かざるをえないメカニズムをつくる。これが一貫した策略だ。これはイギリスなどで、家族ぐるみの都市流入が基本になって、ファミリーの生活維持を賃金の基本にすえるようになったのと根本的にちがう。

にもかかわらず、こうした日本の単身者主義がヨーロッパの個人主義に見合ったものとして理解されていった形跡があり、これをつきつめたいという動機から『日本人の結婚観』を後に書いた。

＊

戦前の日本は、家族無視の行動をとる男たちをもっとも有利に雇い入れることにより企業を成り立たせ発展した。軍隊を典型とする命令組織によって維持される社会、これを支えたのが徹底した単身者主義だった。かれらにとっての女房、家庭とは何か。売春婦の代用としての女房、下宿としての家庭といった極端な想定もあながちウソではない結婚観が、そうした社会構造に見合ってあった。

だからといって、日本の歴史を男性支配の歴史とする井上清氏など女性史専門家によく見られる考え方に私は疑問をいだいている。男優位の思想はむしろギリシャ以来のヨーロッパに認められるのであって、日本は古来男女間のセックスの栄えた国で、そういう国は女性が強い。男が全体としてサムライ化したのは実は明治以後であって、さっき述べた単身者主義が一見、男性の支配のような現象を呈するだけのことである。

＊

近代日本の社会を家族主義社会だとする説がある。この場合の家族とは主として親子関係を考えていわれており、これが会社とか役所とかの組織に類推してつかわれる。明治半ば以後にはこれが国家にまで拡張され、いわゆる家族国家論までが出てくる。そして戦後の今日まで、現に国鉄一家などという考えがまかり通っている。

これについて、これは封建的な家族制度、大家族の遺制がなお根づよく残っているためだというのが、従来のとくに戦後の歴史学界の通説になっている。こういう議論で問題なのは、ファミリーが現に社会の構成単位としてあったのかどうかの見きわめである。私に言わせれば、あったのは家族イデオロギーであって、家族そのものではない。もしわれわれの生活の中にファミリーが健在し、ハッキリとイメージされているならば、そうした擬制のカラクリはすぐバレてしまう。ファミリーの存在そのものがおかしくなり、単身者本位のものに変容、解体してしまったために、そういうウソが見分けられなくなっているのだ。

＊

単身者主義社会の極限形態を日本のスラムに見ることができる。ここではだれも自分の家族や前身を語らない。単身者本位だから、どうにもやっていけなくなると、最後はかならず一家離散で、これでは、一家再結集の見込みはまずない。さらに悲惨なのが一家心中だが、これには同情すべき点がある。日本の社会の目、バラバラな敵意にみちた目を知りすぎているがための選択がそこにはある。

こういう社会の戦後最大の犠牲者は子どもたちである。ふた親が単身者主義だからウルトラ単身者主義になるか、あるいは徹底した批判者になるかのどちらかだ。

女は戦前、家庭本位にできていた。ところが戦争中からそれが変わりはじめる。それまで男の占有物だった単身者本位の都会、職場、文化の中に女が動員され入っていった。それが戦後さらに拡大され、そうした生活、文化を享受することが女の解放と考えられるに至った。そのため奇妙キテレツな現象がいろいろ起こっている。

＊

今日行われている「家庭論」は、よく注意してその正体をつきとめなければいけない。ひところ流行した「マイ・ホーム主義」ということばなど、これの多くは経営者側から言われ、単身者主義保持の立場からの非難であり、また一方「家庭本位で何がわるい」といった反批判であって、いわば居直りの論理がふくまれていた。

個人主義をつきつめると、一匹狼主義になるが、個が孤立するとき、これほど無力なものはない。だからといって、国とか会社とかにくっつくのがいいかというと、そうではない。むしろ中間集団というもの、お互い同士、徹底して責任をもち合える小集団をもたなければ人間は自立できないし、そうした社会的はたらきかけの拠点としての家庭の意味を考えねばならぬと思う。

＊

日本の近代百年は追いつき追いこせで、これを単身者主義によって社会を分解し、一種の核分裂エネルギーをおこしてやってきた。しかし、これからは核融合エネルギー時代で、その意味から家庭生活というものを根底から考えなおさねばならないと思う。問題は以上述べた単身者主義批判を日常生活から社会のあらゆる営みにまで拡げ及ぼしていき、われわれの意図する家庭像をイメージしていくことではないか。

(第1回大学合同セミナーのゲスト講演要旨　文責・編集者)

第1回大学合同セミナー

主題――現代家族と生活意識

――その理念・実態・変革へのアプローチ――

期日――昭和56年3月18～20日

学合同セミナーが誕生した。

山岸、正岡両運営委員の精力的なご指導によって、準備期間の不足その他いくつかの制約にもかかわらず、内容の充実した研究、討議が実施されたことを喜びたい。今回の実績をふまえ、今秋には第2回をひきつづき計画、実施すべく目下、その構想、準備が進められており、大学合同セミナーの特性を生かした成果の持続的発展を今後に期するところ大である。

◇

第一日は開講式のあと、参加学生による自己紹介にひきつづき、夕食時間をはさみ、指導教授五氏による全体講義が二時間半にわたり行われ、最後は早稲田大学研究グループによる研究発表、「現代日本の親子関係」でしめくくられた。

開講にあたり運営委員の山岸氏より、こんどスタートする大学合同セミナーにつき、その趣旨の説明と参加者、とくに一般からの自由参加者の積極的協力への謝意が述べられた。「テーマは家族、場所は大学セミナー・ハウス、どうぞリラックスした、アット・ホームな気持で、この貴重な時間をすごして下さい」と皆の気持をなごませる。

以下、指導教授による全体講義で示された、それぞれの「現代家族」へのアプローチ、その問題設定の要点を紹介する。

〇正岡寛司氏「家族とは何か」

人は自分が生まれ、はめこまれた家族のほかに、もう一つ別の集団、すなわち自分がつくる家族に所属するのだが、その間の移行過程が問題である。

家族組織化のモデルとしては、a母子血縁家族、b父子血縁家族、c核家族、d一妻多夫婚による核家族、e一時的夫婦家族が考えられ、現代家族の代表的な形はcすなわち夫婦と未婚の子どもを構成員とする家族である。

現代家族の特徴を一言でいえばprivatarization（私化）であり、家族（私的世界）と社会（公的世界）の関係を、①両者間の統一的価値が保持された、いわば親族的世界の状態、②両者間の二価値が共存、均衡の状態、③二価値が対立し、公的世界の論理と価値が私的世界のそれを圧迫する状態、④二価値の分極化、すなわち私的世界が肥大する一方、公的世界が抽象化し、その間に断絶がおこる状態、⑤価値の多元化、すなわち家族の社会参加と公的世界の民主化による交差的結合状態の五つに分けることができる。そして現代家族の理想としては、⑤の交差的結合社会の実現をいうことができるだろう。

現代家族の夫婦、親子、きょうだい間の関係の本質をなしているのが愛情であり、あるいは感情の融合である。過去において愛情、感情はかならずしも家族生活において重要な意味をもっていなかった。その間の経緯と将来の発展可能性、この問題を追求したい。

〇平野敏政氏「家とファミリー」

現代家族を社会学的にとらえる場合。まず方法論として、一つのプロセスに収斂するだろうとする見方と、そこに社会・文化の独自性を認め、拡大・分散化の傾向を見る見方、いわゆるコンバージェントなものと見るか、ダイバージェントなものと見るかの問題がある。しかもこの二つの方法論は二律背反的なものというよりも、変換方程式のようなものと見たほうがよく、そうした観点から具体的ケースにアプローチしてみたい。

一つのケース・スタディとして家族の中の老人の社会参加のあり方を見ると、われわれの予想に反して、核家族の中の老人よりも、直系型の家族の中の老人のほうが社会参加の頻度も高く、多様性も多い。これをどう読むかはむずかしい問題だけれども、日本社会の特性として、個人の選択意志による社会参加よりは、家族単位の社会参加、たとえば町内会とのかかわり合いなどのほうが、はるかに多く自然な慣習になっていることがあげられる。こうした身近の細かい観察から問題の本質に迫っていきたい。

〇藤見純子氏「家族と社会的ネット・ワーク」

家族への関心といっても、多くは家族と自分、せいぜい家族と個人という視点に限られていて、家族と社会の関係のあり方にまではなっていないような気がする。日本の家族の変化をいう場合、社会にはりめぐらされた、さまざまな網の目の動きをとらえないと、真実はつかめない。

現代は核家族の時代であり、愛情にもとづく男女の結合を基本とする、というと大方の人は満足する。しかし問題は社会と家族の分離にある。今や家族の機能が縮小され、かつて家族が担っていた、たとえば生産とか子どもの教育とか保健とかいった機能を、個別的、専門的に引き受ける集団や組織が発展して、いわば家族の出る幕がなくなった。そうした官僚制組織の圧迫の下で、家族はどこへ行く。そう考えると、今こそ社会的ネット・ワークの中でドッカリ腰をすえた家族のあり方を、あらゆる角度から模索しなければいけないと思う。親族関係、友人関係をふくめた人間関係の再構成ということである。

〇山岸健氏「人生を考える――生活史へのアプローチ」

生活の視点から家族を見る場合に大事な要素がいくつかある。家族生活をどう見るかは一種の時間論、空間論である。まず家族の網、居住の網、それに住居の網、この三枚の網をかけて見る必要がある。

戦前の家には方位性があり、そこにはある居住の思想があった。現代の居住空間にはそれがなく、人間にとって親しみをもてるコーナーすらなく、単なるボックス・システムに成り果てている。

現代の家族とは私たちの生活史にとって何か。それを考える際、それが私たちの中心部分にどう入ってくるものなのかが問題だ。たとえばファミリー・メンバーがす

〇ゲスト講演〇

単身者主義化の中の家庭観の混迷　立教大学教授　神島二郎氏

〇全体講義〇

1　家族とは何か　早稲田大学教授　正岡寛司氏

2　家とファミリー　慶応義塾大学助教授　平野敏政氏

3　家族と社会的ネット・ワーク　早稲田大学講師　藤見純子氏

4　人生を考える――生活史へのアプローチ　慶応義塾大学教授　山岸　健氏

5　日常性の構造　法政大学教授　田中義久氏

〇調査報告〇

1　現代農村家族の周期的動態　山岸　健氏

2　現代日本の親子関係　早稲田大学研究グループ

〇運営委員〇

山岸　健氏　正岡寛司氏

〇参加学生〇 34名（内女子14名）慶大(17)、早大(6)、法政大(5)、成蹊大(2)、中央大、千葉大、学習院大、立教大(各1)、計8校

◇

従来の大学共同セミナーとは別に、専門分野を同じくする数大学が合同して合宿研修する、いわば専門志向と自主性の濃いセミナーを積極的に育成、推進したいとのかねてからの共同セミナー委員会の意向を体して、ここに最初の大

べて私たちにとって重要なのかどうか。結婚とは何か。私たちにとり最大のイベントの一つ、あるいはリアリティの破壊となる出来事かも知れない、等々。ともかく、創造的な生活はいかにして可能かの問題を一緒に考えていきたい。

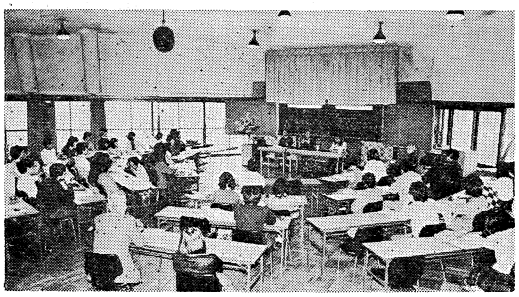
○田中義久氏「日常性の構造」

まず社会意識において次のような時代区分を考えてみよう。①昭和21～29年混迷期、②30～36年転換期、③37～40年上昇期、④41～44年安定期、⑤45～暗転期。

ここで昭和53年（一九七八年）を一つの転換期と私は見たい。それまで上昇傾向にあった私生活主義が拡散し、かつての醇風美俗もしくは広い意味のナショナリズムに呑みこまれそうになる、一つの分岐点と見たい。

私たちの生活構造や生活意識を云々する場合、私と公の関係がいつも問題になる。日本では公といっても擬似「公」というほうが正しいが、この擬似「公」と「私」の関係をどう構築するか、70年代初頭での私の考えは楽観的で、核家族を母胎とする私生活主義が擬似「公」を越えて定着する可能性をいだいていた。ところが80年代に入るや、そこに風化現象がおこり、「私民」から「大衆」へ、「庶民」へと、意識面での還流現象が目立ってきたように思う。アメリカの Me-ism 状況に通ずるような家族の断片化と、欲望と感性による快楽追求、そこにひそむ日本社会の中の功利主義など、楽観を打ち消す要因が確かにふえている。

結局、柳田国男のいう常民の世界へ帰ってしまうか、それとも私生活主義が Me-ism の中に新しい理念化を成しとげることができるか。シーリアスな状況に今われわれは立っているといわざるをえない。



第１回大学合同セミナー会場風景（講堂）

◇

第一日、20時から早稲田大学研究グループによる「**現代日本の親子関係についての調査研究**」の発表と、それをめぐる質疑応答が二時間余にわたり行われた。

説明に当たったのは、今回のセミナーに演習助手として参加された早大大学院生、岩上真珠、池岡義孝、大久保孝治の三氏である。今回の調査は目下準備中の本調査（大量観察）における設問作成のための予備調査として、親子問題に関するオピニオン・リーダー六四名との面接によったものだということ、問題を結婚、居住、出産、育児、女性の就労、家庭内暴力、老親の扶養という、ライフ・サイクルにおける親子をめぐる主要なイッシューに置いたこと、そのさい総理府その他の調査統計を資料として用意したことなどを前提として、その内容と分析結果が細かく説明された。

未だ公表段階にないということで、これ以上はさし控えるが、核家族化、少産化（理想子供数の減少化）傾向に対するほとんどの否定的評価、老人の扶養について、自助あるいは子の扶養か社会福祉かでの意見の二分、家庭内暴力の原因としての育児規範の欠如、および中年期を迎える夫婦と親との関係の困難さの指摘などが、昨今のオピニオンの動向とも関連して注目をひいた。

これに対して、「クレーマー、クレーマー」に代表されるような家族解体イメージへのおそれと反対から、逆に直系家族への回帰を志向しているようにも見えるが…との感想が学生から述べられ、論議はとくに核家族の理念と実態、その欧米型と日本型の違いなどに集中した感があった。

◇

第二日は午前と午後のグループ演習（正岡・平野両先生によるAグループと、田中・山岸・藤見三先生によるBグループに分かれて）と、その間にはさんでの神島二郎氏のゲスト講演、夕食後は早稲田大学研究グループによる「農村家族の問題」の研究発表と、ギッシリ詰まったスケジュールである。

神島氏のゲスト講演「単身者主義化の中の家庭観の混迷」の要旨は別掲のとおりである。多年にわたる氏の研究主題だけに、その理論構築にはすぐれた独創性と説得性があり、聴衆の耳目をひいて、飽かさなかった。

「日本の重層社会でいかに単身者主義は乗り越えうるか」「単身者主義と個人主義のちがいは何か」「単身者主義と家族主義が実はウラハラの関係にあることは、たとえば出稼ぎの実態などから明らかではないか」等々の質問があり、その答えの中で、「現実を隠蔽する家族主義イデオロギーの実態を摘出したいのが真意」だとの神島氏の発言が印象に残った。

夕食後、二〇時から二時間余にわたり発表された早大の調査研究「**現代農村家族の周期的動態**」については、この研究発表に当たった学生自身による別掲の報告原稿を読まれたい。

この指導に当たられた藤見講師から、こうした「社会調査」が早大社会学専攻では二十年ほど前から必修課目になっており、約一年をかけて報告書にまとめるもの、今回の報告は全体の五分の一の過程にあたるいわば中間的なものであり、参加学生は二五名、対象の村落九二世帯を全戸個別調査した、といった調査方法の概要の説明がなされた。

研究発表に当たっては、詳細な調査データのプリントが全員に配られ、データを基にしての説明と質疑応答が活発に行われ、とくに早大生以外の学生には大きな知的刺激になったようである。

◇

第三日は全員による全体会。まずA・Bグループの各代表によるグループ討論の報告があり、それをめぐる意見交換ののち、各指導教授の総括で閉講となった。

そこでも論議の焦点としては一つは正岡・平野両氏から提示された家族問題研究の方法論上の問題、コンバージェントの視点か、ダイバージェントの視点かの問題、一つは神島氏が提起した単身者主義観の問題、さらには小所有の解体とマイ・ホームという幻想の解体の同時進行による80年代の危機的状況把握とそれを越えての新しい「家」構築のあり方の問題があげられる。

最後に運営委員の両氏から大要つぎのようなことばがあった。

山岸氏「早大調査班の貴重なデータに感謝したい。問題はこれをいかに深く読むかだ。トリビアルな、日常的なものの中に、いかに大きなドラマやミステリーがあるかという発見はたのしい。これをステップにして合同セミナーでなければ求めえない研究への道が確実なものとして開かれてきた感じがする。この学習の成果を共同の資産として今後に生かしていく義務が参加者にはある」

正岡氏「こうしたつき合いは専門家同士とのつき合いとは別のこわさ、しんどさがある。分からない部分にはフタをしてというわけにはいかない。身近なものほど分からないものだ。今や、家庭の混迷の上に、家族をとらえる視点、認識がまた混迷している。各人が他への依存心を脱却して、自分自身の眼で認識を深めてほしい」

山岸・正岡両先生のご尽力に心からの感謝を申し述べたい。

〔調査報告〕

現代農村家族の周期的動態

——山梨県北巨摩郡明野村永井の事例——

早稲田大学
第一文学部
赤石　聡
安藤由美
鶴見美子
安田佳裕

私たちは、この合同セミナーにおいて、山梨県の一農村地区を対象とした実地調査研究の中から、特に家族を主題とした研究発表を行った。

この調査研究は、早稲田大学第一文学部社会学専攻の第三学年の授業の一環として行われたものである。私たちのゼミでは、昨年一年間にわたり、山梨県北巨摩郡明野村永井地区を対象として、この農村社会の歴史、社会構造（本分家関係、組連合など）、産業構造、個々の家族の現状および変遷について、全世帯九二戸(注)を対象にして調査票を用いた面接調査を各戸別に行った。調査に要した時間は、一戸あたり平均四時間、長い場合は七～八時間に及んだ。

調査対象となったこの村は、山梨県の北西部の標高約六〇〇mにある山間部の農村である。産業は農業と養蚕が中心であり、主たる農産物は米、レタスなどの高原野菜、大根などである。全戸のほぼ八割が農業を行っており、その内約四割が専業農家である。

＊

戦後の農村社会は、急速な産業化、都市化の進行、あるいは農業構造の変化により大きく変貌した。具体的には若年層を中心とした大量の人口流出、急速な農家の兼業化、非農家の激増をあげることができよう。農村社会の分化、異質化が進み、人々の生活圏は拡大し、直系家族制を中心とした家制度、村落共同体は解体したかのようである。

私たちの調査した永井地区においても、同じような変貌を観察することができた。その変貌を解き明かすための一つの手がかりとして、私たちは世帯の周期的動態に着目することにした。すなわち、永井の各家族が現在どのような世帯形態を示しているかばかりでなく、その家族がどのような世帯形態をたどってきたかを分析することによって、農家としての家のかかえる問題、および村の現状と今後の課題を考察していこうとしたのである。現在の世帯形態別世帯数を示したものが表1、永井における典型的な世帯形態周期を示したものが図1である。

図1を見てわかるように、このムラでは直系家族の周期であるⅢ→Ⅳ→Ⅵ→Ⅲの周期をたどる家が最も多い。こうした周期をたどることによって家は存続していく。したがってこの周期をたどるために、各家々は後継ぎを用意し、家業を継続していこうとあらゆる努力を払ってきたのである。ところが、現在の永井では、その周期をたどることのできない家が、かなり現れてきている。この図でみれば、Ⅲ→Ⅱ、Ⅱ→Ⅰ、Ⅵ→Ⅴに移行している形である。この状態にある家々は、現在すでに子どもたちのすべてが他出してしまっており、家を継承し、農業経営を行っていく上で、不安定な状態に立たされているのである。しかも、ここで特徴的なのは、これらの家々の多くがすでに老人だけの世帯となっている点である。つまり、これらの家々は再び安定した周期にもどるにはきわめて困難な状況、いいかえれば、その存続にとって重大な危機に直面しているわけである。

ところで、家の存続や農業経営において危機的状況に立たされた家は、おそらく過去にも存在していたであろう。しかし、かつてはムラという共同体が、そうした家の問題をムラ全体の問題として受けとめ、しかもそれを解決する能力をもっていた。ところが現在では、個々の家族周期上の諸問題は、各家内部の問題としてムラの関与の外に置かれるようになった。事実、先に示したような危機的状況にある家々に対して、永井の他の家々が積極的になんらかの手を差しのべようとする動きはまったくみられない。ここで注目しておくべきことは、ムラの力が弱化するとともに現れたこうした事態が、さらにいっそうムラ社会の内部的連帯を弱める結果をもたらしているということである。

現在、永井では、ここで取り上げたような家族周期上の危機的状況に直面している家々が目立つようになったばかりでなく、兼業農家、非農家の増加とともに、農業村落としての分化、異質化が進行している。永井の人々が直面している問題は、こうした分化、異質化の進行の中で、新たな地域的統合と連帯をいかにして再構築していくかではないだろうか。そして、このことは永井のみならず、現在の日本の農村社会が共通にかかえている課題に他ならないと思われるのである。（文責・安田）

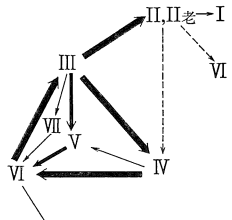
(注)すべて親族世帯である。ここでは同居している親族を家族とみなす。

表1　世帯形態別世帯数

世帯形態	戸数	%	全国平均 %
Ⅰ 世帯主のみの世帯	3	3.3	13.7
Ⅱ 世帯主夫婦のみの世帯	19(12)	20.7	12.5
Ⅲ 世帯主夫婦と未婚の子供から成る世帯	31(4)	33.7	51.4
Ⅳ 世帯主夫婦と子ども夫婦から成る世帯	10	10.9	
Ⅴ 世帯主夫婦とその父母から成る世帯	5(2)	5.4	
Ⅵ 世帯主夫婦とその父母，子どもから成る世帯	18	19.5	22.4
Ⅶ 世帯主のきょうだいを含む世帯	3	3.3	
Ⅷ その他	3	3.3	
計	92	100.1	100.0

(注)
1. 全国平均は1975年度国勢調査による
2. (　)内は世帯主が60歳以上の老人世帯
3. Ⅲ～Ⅶの形態のばあい，世帯主夫婦の一方が欠けているものも含む

図1　世帯形態周期



実線：太さは頻出度を示す
破線：予想される移行

昭和56年度 第1回 大学教員懇談会準備委員会

本年度第1回大学教員懇談会準備委員会は去る5月30日、私学会館において井早康正委員長以下九名の出席のもとに開催された。

中川館長のあいさつのあと、本年度事業計画として第18回大学教員懇談会を開催する件につき協議の結果、「大学教育のあり方—一般教育を中心として—」を主題に来る9月26～27日、実施することに決定、準備委員の中から、東洋大学教授大川信明氏（代表）と東京大学教授小林善彦氏を世話人、その他世話人・発題者候補若干名の選出を決め、その交渉と最終決定を代表世話人に一任することになった。その結果の最終プランは別記予告のとおりである。

また、懸案の大学教員懇談会委員会設立の件については、井早準備委員会委員長より、その後の状況判断から、あと一年間は設立を見合わせ、従来どおりの世話人制度で懇談会の運営に当たることとし、その間に来年度以降の方針を決めたい旨の提案があり、一同これを了承した。

法人ニュース

第46回理事会・第29回評議員会

昭和56年5月25日
銀行倶楽部

▼理事・評議員人事
▼昭和55年度事業報告案
▼昭和55年度決算報告案
▼協力会員加入脱退取扱いの件

【出席者】
〈理事〉川喜田愛郎、飯田宗一郎、永井道雄、村井資長、中川秀恭、岡山猛
〈監事〉平島正喜、隅谷三喜男
〈評議員〉鈴木皇、平出宣道、村山松雄、吉田久、諸星静次郎
委任状による者　理事10名、評議員75名

＊

茅理事長が病気欠席のため永井道雄氏が代わって理事会・評議員会合同会議の議長をつとめることを全員賛成、審議に入った。理事・評議員人事については永井議長から、あとは岡山専務理事から逐次、議案について説明があり、それぞれ質疑応答ののち、賛成多数で可決承認された。

▼理事・評議員人事

協力会員校の学長交替に伴う評議員の交替として、東京大学長平野龍一氏の新任（向坊隆氏の退任）、東京都立大学長楠川絢一氏の新任（沼田稲次郎氏の退任）、日本女子大学長青木生子氏の新任（道喜美子氏の退任）、東京家政大学長津郷友吉氏の新任（三木テイ氏の退任）および㈱東京芝浦電気社長佐波正一氏の新任（岩田弐夫氏の退任）が承認された。

また去る4月27日、新たに協力会員校に加入申込があった埼玉大学については加入承認に伴い、同大学長須甲鉄也氏の新任が承認された。

理事については東京大学長平野龍一氏の新任（向坊隆氏の退任）、一橋大学長宮沢健一氏の新任（蓼沼謙一氏の退任）、明治大学長山本進一氏の新任（麻生平八郎氏の退任）、東京都立大学長楠川絢一氏の新任（沼田稲次郎氏はひきつづき留任）が承認された。

▼昭和55年度事業報告
▼昭和55年度決算報告

具体的内容については別掲の「大学共同セミナー白書」と「業務白書」および「収支決算書」に記すとおりである。

55年度は54年度にひきつづき、利用目標を上廻る利用実績と諸経費の節約で財務上は事なきをえた。ただし、事業計画中、共同セミナーの一部（大学院共同セミナー、大学合同セミナー）および従来年一回実施の国際学生セミナーを未実現で終わったこと、ニュース・年報の刊行に遅延をきたしたこと、および開館十五周年記念募金、賛助会員制の発足を期しえなかったことに対し、岡山専務理事他から事情説明と遺憾の意思表明があり、監事から来年度以降の法人運営についての責任ある善処の要請があり、事業報告書案については一部の記載補正を条件に、原案が承認された。

▼協力会員加入脱退取扱いの件

別掲紹介のとおり今回協力会員校として埼玉大学、準協力会員校として先に加入の恵泉女学園短期大学につづき実践女子短期大学他三校から加入申込があり、全員の賛成をもってこれを承認。

なお、今後の加入脱退の申込に関しては随時文書により理事にはかり理事長の裁量で決裁することを可決承認した。

昭和55年度経常部収支計算書（55.4.1～56.3.31）

1.　収支計算の部

収入の部 科目	金額(円)	支出の部 科目	金額(円)
基本財産運用収入	214,841	人件費	114,469,114
事業収入	157,908,683	法人諸費	1,734,121
宿舎収入	120,342,490	事務費	11,988,727
施設収入	26,933,830	土地建物費	10,600,747
食堂収入	10,632,363	事業費	58,738,744
施設改修協力金収入	9,262,740	一般事業費	8,381,617
協力会員校会費収入	41,250,000	学生指導セミナー	9,782,938
補助金収入	14,159,000	普通セミナー	40,574,189
寄付金収入	670,136	固定資産取得支出	3,098,800
セミナー会費収入	3,687,000	長期未払金返済支出	18,000,000
雑収入	6,735,799	未払金返済支出	2,534,127
繰入金収入	5,123,938	積立預金支出	22,100,000
積立預金取崩収入	14,100,000	基本金特定預金支出	785,589
前期繰越収支差額	13,827,930	学生指導セミナー繰入金支出	3,687,000
		臨時部流用支出	12,447,000
収入合計	266,940,067	支出合計	260,183,969
		次期繰越収支差額	6,756,098

2.　正味財産増減計算の部

増加の部 科目	金額(円)	減少の部 科目	金額(円)
資産増加額	50,078,389	資産減少額	47,254,716
負債減少額	34,634,127	基本金増加額	785,589
前期繰越増減差額	488,588,204	引当金増加額	22,100,000
増加額合計	573,300,720	減少額合計	70,140,305
		次期繰越増減差額	503,160,415

昭和56年度経常部収支予算書（56.4.1～57.3.31）

収入の部 科目	金額(円)	支出の部 科目	金額(円)
基本財産運用収入	250,000	人件費	120,617,000
事業収入	150,815,000	法人諸費	2,170,000
宿泊収入	115,775,000	事務費	17,660,000
施設収入	24,140,000	土地建物費	19,047,000
食堂収入	10,900,000	事業費	65,935,000
施設改修協力金収入	9,810,000	一般事業費	8,237,000
協力会員校会費収入	57,100,000	学生指導セミナー	11,138,000
補助金等収入	16,904,000	普通セミナー	43,060,000
学徒援護会	14,904,000	国際プログラム	3,500,000
日本国際教育協会	2,000,000	未払金返済支出	2,500,000
寄付金収入	500,000	退職給与積立預金支出	2,000,000
セミナー会費収入	6,675,000	減価償却積立預金支出	4,000,000
雑収入	5,500,000	修繕積立預金支出	5,500,000
千人会繰入金収入	3,100,000	学生指導セミナー繰入金支出	5,725,000
		予備費	5,500,000
計	250,654,000	計	250,654,000
前期繰越収支差額	6,756,000	次期繰越収支差額	6,756,000
合計	257,410,000	合計	257,410,000

より有効な利用と交流のために

大学セミナー・ハウス 協力会員校懇談会

昭和56年5月25日／銀行倶楽部

大学セミナー・ハウスの現状と将来の課題をめぐり、協力会員校との間に自由な意見交換による共通理解をとの茅誠司理事長の要望にそった懇談会が、5月25日16時から丸の内銀行倶楽部で開催された。

別掲のとおり、二二大学から学長もしくは学長代理の臨席を得て、終始親身な話合いがもたれたことは幸いであった。

茅理事長が折悪しく病気欠席のため、永井道雄常務理事が代わって開会の挨拶、ひきつづき司会役をつとめ、約二時間にわたる談合が行われた。

文部省学生課長菴谷利夫氏の挨拶のあと、中川秀恭館長から当法人の営む教育事業につき、また岡山専務理事からは法人の行う業務一般につき、それぞれ現況と今後の計画ならびに基本方針の概要が説明された。

とくに今年度、協力会員校会費を値上げせざるをえない事情と開館以来の会費改訂の推移につき具体的データにもとづく説明がなされ、一同の了承をいただいた。

このあと、出席者全員による自己紹介と意見の開陳があり、これからの法人運営のため貴重な助言が寄せられた。ご協力に感謝いたすとともに、以下そこで交わされた意見の中からいくつか要点を拾って紹介したい。

＊

○電気通信大・平島正喜氏　われわれ関東七大学の工学部が合同ゼミを毎年やっており、昨年から単位の互換（2単位）制実施にふみ切った。そうした大学合同セミナーの場としての共同利用などをより積極的にはたらきかけたら、意義も大きいし、まだまだ利用は伸びるのではないか。

○上智大・鈴木皇氏　単位の認定と互換制はぜひ考えるべきだし、実施の段階に来ていると思う。集中講義にはまさに格好の場であって、二泊もできれば普通教室で行っている一学期分に相当する成果も期待できるのではないか。そうした効用をもっとPRしてもいいと思う。それと研究者相手のサマー・スクールなども開設したらどうか。

○津田塾大・坂上昌幸氏　しばらく他所でやっていたオリエンテーション・キャンプを今年からまた復活した。学生もたいへん喜んでいる。共同セミナーの学生に対する刺激は大きい。ぜひ、いっそうの充実を期待したい。

○お茶の水女子大・尾田幸雄氏　新入生のオリエンテーションは一五年連続してやらしていただき、感謝している。大学では得られぬここでの体験は大学生活の出発点として、私たちの予期以上の意味を学生に与えているようだ。

○東京外語大・鈴木幸寿氏　共同セミナーへの参加者が他大学に比べて多いが、うちでは総合課目をやっていないので、その欠を埋めたい要求からだろう。折角の共同セミナーだから、もっと学生の参加をうながす工夫をすべきだし、私たちも努力していきたい。また、語学教育などに、工夫すれば、たいへん効果的な利用法があるのではないか。ただ利用教授の固定化傾向がめだつのは一つの問題といえるかも知れない。

○慶応義塾大・福岡正夫氏　教授相手のPR材料がもっとほしい。まだまだ、ここの存在を知らない先生方が結構多い。それとインター・ゼミの利用をすすめてみたらどうか。

○武蔵大・岡茂男氏　ゼミの計画は多く学生たちによっている。ゼミナール委員会など学生の組織をもっと利用するのが有効だろう。大学への連絡は学長だけでなく、学部長単位にしてもらいたい。

○東京都立大・楠川絢一氏　利用率がトップなのはうれしいが、これは大学として学外施設を持っていない事情によるので、余り自慢にはなるまい。錬成会や学内オリエンテーションは八王子でというのが常識になっている。ともかくたいへんお世話になり、感謝のほかない。

○東京農工大・諸星静次郎氏　大学から近いし、よく利用している。学生、教授の変動がはげしいのでPRは毎年やってほしいし、学部単位に送ってほしい。

○明治学院大・平出宣道氏　一五年前の開館式に列席したが、泥んこの中で始まった、あのころのことがなつかしく思い出される。国公私立間の交流、共同セミナーなどによる学問的交流、さらには国際的交流と、ここで開拓した仕事はすばらしい。問題は法人内部の運営にあるようだが、早く解決して本来の姿で事業の発展を考えてほしい。

○千葉大・近藤精造氏　学生の利用はもとよりだが、教授や職員の研修や集会にも評判がいい。大学間の横の連絡には格好の場である。ぜひ活用をはかっていきたい。

○埼玉大・福田幸寿氏　たいへん立派な利用実績だと思う。これも過去の努力と営為の積み重ねによるのだろう。遅ればせながら会員校に加えていただいた。よろしくおつき合いねがいたい。

〔懇談会出席者氏名〕（順不同、代は学長代理の略）

電気通信大学長平島正喜氏、東京農工大学長諸星静次郎氏、東京学芸大学長阿部豊氏、東京医科歯科大学長吉田久氏、千葉大学(代)近藤精造氏、お茶の水女子大学(代)尾田幸雄氏、東京大学（代）北折昭一氏、東京外国語大学（代）鈴木幸寿氏、埼玉大学（代）福田清成氏、東京都立大学総長楠川絢一氏、東京経済大学長渡辺輝雄氏、東京女子大学長隅谷三喜男氏、武蔵大学長岡茂男氏、明治学院大学長平出宣道氏、成蹊大学（代）保谷秀雄氏、日本女子大学（代）館岡孝氏、慶応義塾大学（代）福岡正夫氏、津田塾大学（代）坂上昌幸氏、国際基督教大学（代）大和久泰太郎氏、青山学院大学（代）木下政久氏、学習院大学（代）原島幸太郎氏、上智大学（代）鈴木皇氏。

文部省大学局学生課長菴谷利夫氏、同補導係長岩本智弘氏、同補導係金口恭久氏。

法人側　永井道雄、川喜田愛郎、村井資長、沼田稲次郎（以上常務理事）、中川秀恭館長、岡山猛専務理事。

「開かれた大学」へ さらに一歩

●準協力会員校に五短大が加入

既報のとおり去る2月3日理事会承認により発足した準協力会員校制については早速喜ばしい反応、問合せを受けており、つぎの五校から加入の申込みを受け、別掲のとおり理事会は心からの歓迎をもって、これを承認した。

恵泉女学園短期大学（学長秋田稔氏）、実践女子短期大学（学長多田基氏）、産業能率短期大学（学長上野一郎氏）、白梅学園短期大学（学長細谷俊夫氏）、文京女子短期大学（学長島田依史子氏）。

これを機会に会員校との連絡をより一層密にし、当ハウスの利用の上でも準協力会員校のもつ特性や要望に応じたサービスなど、細かい配慮を心がけたい。ひろくご教示いただければ幸いである。

昭和55年度　業務白書

●年間利用者五万五、六〇八人

昭和55年度の宿泊延人数は、表1に示すとおり五万五、六〇八人と、前年度つくられた最多記録を二、一七一人上回る新記録となった。これにより開館以来の延総利用者数は昭和56年3月末現在、六二万八、三〇九人となった。

この年、諸経費の増大に対処しての利用料金の改訂を実施したにもかかわらず、右の実績をあげえたことについては、まず利用者各位のご支持に感謝したい。

●利用者の種別、利用の態様

利用者の中で協力会員校による利用の占める率四七％はほぼ例年どおりである。会員校、非会員校とも、その大半は教授と学生のゼミ合宿だが、春季の新入生オリエンテーション、夏季の、大学間の垣を越えての各種国際集会、全国集会、長期研修集会、秋・冬季の卒論・修論ぜみ等々と、季節に応じた研修企画の型の変動もおおよそは固定したようである。

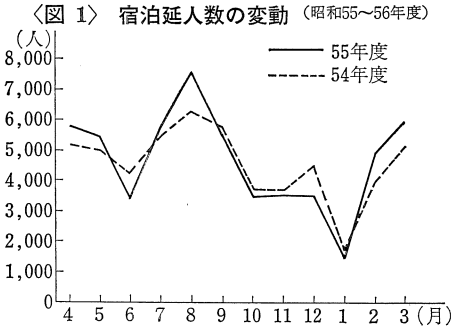
これを宿泊日数別の統計によると、ゼミ回数では一泊、二泊が圧倒的に多く、三泊、四泊以上となるとグッと少ない。平均宿泊日数は54年度が一・七二泊、55年度が一・七三泊とほとんど動かない。

協力会員校の利用状況は表3のとおりで東京都立大学、早稲田大学、東京大学がゼミ回数、宿泊延人数で上位三校となっているのもここ数年変わらない現象だ。ただし、在籍学生一〇〇人当たりの当ハウスの宿泊延人数を比べると、様相はちがってくる。こんどベスト15に武蔵工業大学、東京女子大学、文教大学の三大学が新たに加わったが、年間延人数とはいえ、在籍学生の一〇％以上が当ハウスを利用、宿泊する大学が、現に一五校を数えるという事実はうれしい。また、それ以上にうれしいのは、ここ数年ほとんど利用しなかった二、三の会員校の当ハウス利用が再び見られたことである。

〈表 1〉　利用者別宿泊人数・ゼミ回数　（ ）内は前年度数

	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	比率(%)	1団体平均実人数
会員校	720(742)	61	26,329(25,791)	47	22(23)
非会員校	162(169)	14	7,068(7,735)	13	28(46)
大学連合	34(36)	3	4,047(4,505)	7	47(55)
学会・教育団体	90(93)	7	9,162(7,774)	17	51(41)
社会人団体等	181(160)	15	9,002(7,632)	16	30(27)
合計	1,187(1,200)	100	55,608(53,437)	100	27(26)

〈図 1〉　宿泊延人数の変動　（昭和55～56年度）



●年間宿舎利用率は五八・二％

大学セミナー・ハウスをとりまく内外の状況変化にもかかわらず、利用率も年々向上し、遂に五八％台に達した。これは同種の他施設と比べると、かなり高い率といえるようだが、なお一層の向上に努力し、経営の健全化をはかりつつ、会員校、利用者の負担軽減をめざしたい。

図1および表2でご覧のとおり当ハウスの利用状況は月によって大きく変動する。試験シーズンその他の事情から大学関係の利用がめだって減少する月の利用と、週末を除いた平日の利用を、当ハウスの事業に理解ある各種団体などにぜひおすすめしたい。日曜から月曜にかけても意外に空いていることが多い。

〈表 2〉　月別利用状況　（ ）内は前年度数

月	ゼミ回数	宿泊延人数(人)	定員比(%)
4	102	5,797(5,032)	71.6(62)
5	83	5,365(4,886)	64.1(58)
6	75	3,377(4,151)	46.3(51)
7	108	5,553(4,843)	66.3(58)
8	104	7,733(6,659)	92.4(80)
9	149	5,285(5,625)	65.2(69)
10	81	3,542(3,652)	42.3(44)
11	92	3,491(3,632)	43.1(45)
12	107	3,482(4,408)	47.8(60)
1	52	1,373(1,634)	18.8(22)
2	125	4,738(3,869)	62.7(49)
3	109	5,872(5,046)	70.2(60)
計	1,187	55,608(53,437)	100.0(100)
月平均	99	4,634(4,453)	58.2(55.3)
1日平均	3	154(149)	

●利用者のための交歓プログラム

大学共同の広場である当ハウスは、折を見ては各大学の枠を越えた教師・学生の交流、交歓の機会を設け、〝コミュニティの生活〟の楽しみを分かっている。夕食時の交歓会、季節の行事、茶道教室など、年間三五回のプログラムを実施、二二七グループ、五、〇一六人が参加した。

眺望に恵まれた交友館サロン室も、ゼミ合間の憩いの場、コンパなど小集会の場として利用者にはすっかり馴染みになっている。

利用者自身の心にかなった、楽しい思い出となるような独自の交友、交歓プログラムの計画・提案をこそのぞみたい。

〈表 3〉　会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数	順位	校名	在籍学生100人当りの宿泊延人数
1	東京都立大学	59	1	東京都立大学	1,561	1	東京都立大学	41
2	早稲田大学	57	2	早稲田大学	1,526	2	国際基督教大学	22.4
3	東京大学	50	3	東京大学	1,275	3	お茶水女子大学	22.3
3	中央大学	50	4	法政大学	1,251	4	津田塾大学	22.2
5	法政大学	36	5	東海大学	968	5	武蔵大学	21
6	慶応義塾大学	34	6	中央大学	944	6	東京薬科大学	20
7	東京学芸大学	24	7	立教大学	927	7	東京医科歯科大	17
8	駒沢大学	22	8	慶応義塾大学	883	8	東京学芸大学	16
9	学習院大学	21	9	駒沢大学	843	9	武蔵工業大学	12.2
9	青山学院大学	21	10	東京学芸大学	839	10	順天堂大学	12
11	一橋大学	19	11	武蔵大学	747	11	一橋大学	11.4
11	立教大学	19	12	青山学院大学	736	12	東京女子大学	11.2
13	日本大学	17	13	学習院大学	669	13	文教大学	10.7
13	明治学院大学	17	14	津田塾大学	630	14	杉野女子大学	10.5
13	武蔵大学	17	15	成蹊大学	594	14	学習院大学	10.5

中央大学の利用者数はスクーリング学生の宿泊数を除いたもの

昭和55年度 大学共同セミナー白書

昭和55年度は、表1－Aのように計五回の大学共同セミナーを実施した。法人運営面の態勢不備の結果、企画室の事務遂行の上で円滑さを欠く点があり、年度当初に予定されていた大学院共同セミナーは実施に至らなかったが、共同セミナー委員会の精力的ご協力のおかげで、春と秋には開館十五周年を記念した大型セミナーが組まれ、充実した成果をあげえた。

参加者総数は、表2－①に見るように三四九名、各回平均七〇名で、共同セミナーの過去の記録の中でも、共に少ないほうの記録である。また参加者数に比例して、大学数も五五校にとどまり（例年六〇数大学）、地方の大学の参加も少なかったのは残念である。上位四校は早稲田、東京、慶応、津田の順で昨年とかわらず、五位に東京外国語と横浜国立が入った。男女の割合は六四：三六、実数にして九七名男子が多く、私立大学に限って見れば51年度から男子を上回っていた女子の参加は五年ぶりでストップした。

表2－②は、参加者の所属学科により専攻分野を見たものである。51年度より毎年人文科学系が多かったが、本年度は一〇％も社会科学系が人文科学系を上回った。第109回と第111回の大型セミナーに社会科学系の参加者が多かったことが、そのまま全体の中でのウェイトを占めることになった。

自然科学系は一六％と昨年についで多く、年間テーマの取り上げ方は成功したと言ってよいだろう。

一方、従来の共同セミナーとは別に、本年度は数大学のゼミによる合同セミナーを新たに発足させ、慶応、早稲田、法政の三大学、社会学専攻の五ゼミを中心として、第1回が開催された（表1－Bを参照。参加状況の表は省略）。ただ、これも当初予定されていた第2回が実施できず、本年度の年間プログラムの実施回数は合計六回で終わった。

〈表1—A〉 昭和55年度大学共同セミナー開催状況

① 大学共同セミナー

回数	期間	主題	指導者名	参加人員
第109回 (1)	昭和55年 5月30日 ～ 6月1日	エネルギー・システムと現代社会（開館15周年記念）	向坂正男 岸田純之助 太田時男* 深海博明 西川 潤 佐藤光雄 石谷清幹 道家達将（野田春彦）	81名 (26校)
第110回 (2)	7月11日 ～13日	藝術のたのしみ（第4回）“劇的なるものを求めて”—演劇と映画のドラマ，その歴史・鑑賞・実際—	岩淵達治 増見利清 丹羽文夫 西村博子 寺崎裕則 白井佳夫 宮下啓三*	75名 (34校)
第111回 (3)	10月24日 ～26日	転機に立つ平和と人権（飯田さんの功労に感謝する開館15周年記念）	坂本義和* 田中寿美子 ダグラス・ラミス 色川大吉 高橋進 馬場伸也* 砂田一郎 山本 満 北沢洋子 石田 雄 田中 宏	111名 (27校)
第112回 (4)	12月12日 ～14日	生けるサルトル	竹内芳郎 三枝和子 平井啓之 今井仁司 木田 元 海老坂武* 白井健三郎*	29名 (17校)
第113回 (5)	56年 1月16日 ～18日	個性と創造性 —日本の未来のために—	渡辺 茂 山本七平 飯田宗一郎 大森荘蔵 村上陽一郎 江沢 洋 粟津 潔 樺山紘一 杉田弘子 芳賀 徹 中野博司（岡 宏子）（野田春彦）（山岸 健）	52名 (20校)

〈表1—B〉

② 大学合同セミナー

第1回 (1)	昭和56年 3月18日 ～20日	現代家族と生活意識—その理念・実態・変革へのアプローチ—	神島二郎 正岡寛司* 平野敏政 田中義久 山岸 健* 藤見純子	34名 (8校)

* 印は，運営委員を兼ねた講師。（ ）内は運営委員を示す。

〈表 2〉 昭和55年度大学共同セミナー参加状況（計5回）

【①大学別参加者数】

＜国立大学＞		＜私立大学＞			
17校94（20）		38校 223（97）			
東北	1	城西	2	東京女子科	9（9）
筑波	11（2）	独協	1	東京理科	3
埼玉	4	青山学院	1	日本	3（1）
千葉	2（1）	亜細亜	2	日本女子	4（4）
東京	27（4）	大妻女子	1（1）	法政	2（1）
東京医科歯科	1	学習院	7（2）	武蔵業	6（4）
東京外国語	13（7）	共立女子	6（6）	武蔵工治	1
東京学芸	1	慶応義塾	25（4）	明治学院	9（4）
東京農工	2	工学院	1	明治学	4（4）
お茶の水女子	1（1）	国際基督教	11（5）	立教	6（5）
一橋	10（2）	駒沢	1（1）	早稲田	56（17）
横浜国立	13	芝浦工業	2	神奈川	1
山梨	2	上智	7（4）	相模女子	2（2）
信州	1（1）	杉野女子	1（1）	産業能率	3
静岡	1（1）	成蹊	5（1）	同志社	1
名古屋	3	成城	1（1）		
大阪	1（1）	聖心女子	1（1）	＜その他＞	31（8）
		創価	1		
		玉川	1	55大学	317(117)
		多摩美術	1	その他	31（8）
		中央	6		
		津田塾	18（18）	合計	348(125)
		東京経済	11（1）		

●事業部だより

56年4・5月
―若葉の季節の合宿状況―

●新年度4・5月の概況

年度明け4月の第一週は、例年春休み最後を利用する各大学の合宿で賑わう。今年も宿泊者は連日二〇〇人を越え、新年度最初の週末の利用グループは一五を数えた。そして新学年の始まる第二週に入ると、この丘の様態は大きく変わる。新入生を対象とする各大学の学部・学科ないしクラス単位の大型合宿が次々と繰り広げられるからである。この〝オリエンテーションの季節〟は例年5月に最盛期を迎え、7月中旬に終了する。両月の利用状況を数字で示すと、4月はグループ数一〇六、宿泊延人数五、九一九人（定員比七三%）。恒例化した〝交通ストの影響で月後半の数日間利用者が激減したにもかかわらず、これは4月の最多記録。5月はグループ数九四、宿泊延人数五、一六三人（定員比六三%）となる。これら延人数に占める会員校と非会員校の比率は、たまたま両月とも五九%と二五%で、合計八四%。残る一六%が学会・教育団体、企業関係の利用となる。なお、両月中に実施された前記新入生合宿関係の利用は計五一グループ、延べ六、〇一六人で、これは両月の宿泊延人員の五四%に当たる。

ファイア・ストームを楽しむ
津田塾大新入生たち

●新入生合宿――今春の話題

4・5両月中に実施された大学関係の新入生オリエンテーション合宿でクラス単位以上の規模のものは別掲一覧（10ページ）のとおりである。

これにゼミなどの小グループや各種学校等の一二グループ一、二二九人（教師五六人）を加えると合計五一グループ、実人員で五、五八六人（教師四九一人）となり、昨年を上廻る。当ハウスでの実施校（グループ）数が年々増えていることは、新入生を迎え入れる各大学の真剣な対応、その施策の一つとして試られた「合宿研修」に対して高まる評価を反映するものといえよう。今年当ハウスで初めてオリエンテーションを実施したのは、4・5両月分については、芝浦工業大建築学科、中央大哲学・教育学科、東京農工大応用物理学科、中央大「心理学」会等である。そしてこの春は、大変嬉しいことに、この丘に一〇年ぶりの再来という新入生合宿を迎えることができた。電気通信大短期大学部、そして津田塾大の全学フレッシュマン・キャンプである。後者は、47年まで毎年当ハウスで実施されたものだが、以後数学科を除いて中断されていた。このたび国際関係学科と英文学科（6月実施）が久々にカムバック、津田塾大全学科フレッシュマン・キャンプの復活となった。

5月中旬に行われた右記国際関係学科のキャンプは、当初の利用申込み以降大幅に増員、当ハウスの定員をはるかに上廻る教師・学生計三一八名が参加することになったため、学生の一部が構内の民家・遠来荘に宿泊するという異例の大合宿となった。しかし、一四のセミナー室を使用したクラス別・テーマ別話し合い、全員参加の〝壮大な〟ファイア・ストームと花火（別掲写真）、講堂での活発なパネル・ディスカッション、大東学長を迎えての和気に満ちた昼食パーティなど――すべてに教官・上級生（同キャンプ「友の会」奉仕グループ）・新入生の三者が息の合ったところを見せて、まことに気持のよい「家族的なキャンプ」を再現して下さった。「……たった二日とはいえ、ゼミの仲間や先生方と有意義で非常に楽しい時を過ごすことができました。仲間とはより一層親しさが増したように感じられ、今まで顔と名を知っていた程度の先生方ともお話しして、その人柄や性格の思わぬ面を知ることができました。スタッフの先生や先輩方が大変だったろうと感謝すると共に、私たちもぜひ後輩たちのためにフレッシュマン・キャンプを企画してあげたいと思いました」。「……大学生活でまず私の期待するものは〝人間関係〟です。さまざまな活動を通して、自分の持たない面を持っているいろいろな人びとと接して、私の人間形成に役立たせることができればと思います。同時に私も他人に良い影響を与えることができる人間でありたいと願っています。わずか一泊でしたが、理解していたつもりの友人の別の面を発見したと思います。いろいろと本

〈表 2〉

【②学科別参加者数】

学科＼回数	109	110	111	112	113	合計	比率（%）	
文学	2	23	16	16	12	69（45）	19.8	33.9
史学	1	—	3	—	—	4（4）	1.2	
哲学	—	2	1	—	2	5（2）	1.4	
教育学・心理学	6	4	2	—	2	14（7）	4.0	
芸術	—	13	—	—	—	13（9）	3.7	
教養	2	—	—	—	—	2（1）	0.6	
その他の人文科学系	4	1	1	1	4	11（5）	3.1	
法学・政治学	8	7	38	3	6	62（11）	17.8	43.6
商学・経済学	18	6	22	5	4	55（4）	15.8	
社会学	—	—	8	3	2	13（8）	3.7	
国際関係学	3	1	16		2	22（18）	6.3	
その他の社会科学系	—	—	—	—	—	—	—	
理学	6	1	1	1	14	23（5）	6.6	16.4
工学	21	8	—	—	—	29	8.3	
農学	1	—	—	—	—	1	0.3	
医学・歯学・薬学	—	2	1	—	1	4	1.2	
家政	—	1	—	—	—	1（1）	0.3	0.3
その他	9	6	2	—	3	20（5）	5.8	5.8
合計	81	75	111	29	52	348（125）	100	100

（注）（ ）内は内数で女子。
その他……研究生，聴講生，専修科，大学校，卒業生，中高教員。

【③学年別・男女別参加者数】

区分	1年	2年	3年	4年	大学院	その他	計	比率（%）
男	18	36	50	64	28	27	223	64
女	19	23	41	23	7	12	125	36
計	37	59	91	87	35	39	348	100
比率（%）	11	17	26	25	10	11	100	

当に有難とうございました」――同キャンプ終了後寄せられた感想の一部であるが、これら新入生のことばにじむ暖かい人間味と共同体意識には私どもハウス職員も大いに励まされるものがあった。

なお、別掲記事のとおり、今年度は準協力会員校制度が発足したが、5月13日より前後二班に分かれて新入生セミナーを実施した文京女子短大が、準会員校としての利用の第一号である。もっとも、この新入生セミナーは昭和46年以来の連続開催であるから、今年で一〇回目で、この丘の春の定例行事となっている。すでにお馴染みの教職員の方々を、セミナーの合間に交友館に招待、準会員校加入を歓迎申し上げた。

●恒例の新入生セミナーから

本格的な新入生オリエンテーションが当ハウスで実施されるようになったのは昭和42年以降。当時からすでに一〇年以上もその合宿を継続開催しているグループの一つに日本女子大の社会福祉学科がある。同学科は大正10年に創設、以来社会福祉の専攻をもつ日本の大学のなかで先駆的役割を果してきた。そのオリエンテーション・セミナーで、毎年、新入生は同学科創設の精神の意味をかみしめながら、社会福祉の道を選んだものの自覚や期待に意欲を燃やす。本号の「わたしたちの合宿」では、当初より同セミナーを推進してこられた一番ヶ瀬康子先生（当ハウス開館以来の協力者のお一人でもある）から、この伝統ある合宿セミナーの一端を紹介していただくことができた。

◆わたしたちの合宿◆

年々歳々〝出会い〟の丘に

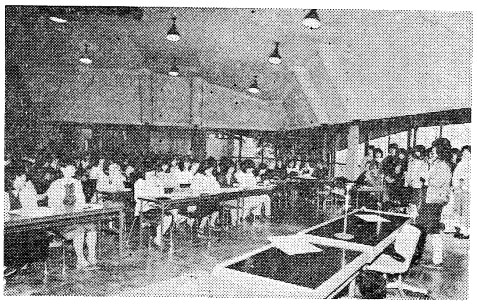
一三年目の社会福祉学科オリエンテーション

日本女子大学教授　**一番ヶ瀬康子**

このセミナー・ハウスで、日本女子大学社会福祉学科のオリエンテーション・セミナーがおこなわれるようになってから、すでに一〇年以上たっている。第1回目のそれは昭和44年であった。それまで、学内で簡単なオリエンテーションがおこなわれていたが、学生数がふえたことや、社会福祉学科志望の動機が多様化してきたことなどが理由で、まず新入の時から学生との交流を深めたいとの教員側の願いが高まり、ここでのオリエンテーションが始まったのである。中身は、毎年工夫をして、少しずつよくなってきたが、ここ数年は、ほぼかたまってきている。それは、最初に、まず新入生一人一人の自己紹介、それから教員各自の自己紹介をおこなう。そのあと「日本女子大学社会福祉学科五十年の歩み」というスライドを写す。そして翌日は、グループに分かれ、各グループに教員が一人ずつ参加して、社会福祉学科志望の動機、大学生活の抱負また日本女子大学社会福祉学科そのものに対する期待等々を話し合う。その話し合いの結果を、グループの一人がまとめて述べる。教員の代表が、それにコメントを述べるという方式である。そして、最後には、皆で歌を歌う。時には野外劇場に行って歌うこともある。

このようなことをこの数年、毎年繰り返してきたが、学生の評判はきわめてよいようだ。「大学に入ってよかった」「社会福祉学を学ぶ意欲が湧いてきた」「また来たい」「このようなセミナーを、たびたびやって欲しい」などの感想が、毎年のべられている。私どもは、さらに大学院の学生たちとも、教員全員が参加してのセミナーを毎年やっており、その場にここを使ったことも少なくない。

ところで、セミナー・ハウスの魅力とは、何であろうか。それは、教員と学生との〝出会い〟の場を、建物のうえでも、また雰囲気のうえでも見事につくり出していることだ。その配慮が満ちているということであろう。おそらく今後も、このセミナー・ハウスでの私たちのセミナーは、毎年おこなわれるであろう。



つぎつぎと自己紹介する日本女子大新入生（講堂）

昭和56年4・5月　新入生オリエンテーション実施状況

学校名	参加者数
●4　月	
東京薬科大（新入生歓迎キャンプ）	181(—)
東京医科歯科大医・歯学部	182(26)
学習院女子短大国文学科	145(7)
東京大教養学部文科三類4組	52(—)
東海大医学部	*156(19)
電気通信大短期大学部（第2部）	164(13)
武蔵工業大土木工学科	139(15)
都立工科短大機械工学科	49(8)
都立工科短大精密機械工学科	41(8)
東京農工大農業工学科	35(5)
慶応義塾大国際センター（留学生）	53(5)
日本女子大社会福祉学科	109(9)
芝浦工業大建築学科	116(14)
都立商科短大経営学科	97(12)
早稲田大教育学科	95(4)
中央大哲学・教育学科	55(7)
工学院大工業化学科	135(22)
●5　月	
職業訓練大学校	241(44)
東京学芸大幼稚園教育学科	37(4)
東京都立大数学科	67(11)
東京学芸大化学教室	51(4)
東京学芸大物理学教室	34(4)
東京学芸大理科教育教室	18(2)
東京学芸大音楽教育学科	102(13)
都立立川短大	104(18)
文京女子短大	216(10)
文京女子短大	218(10)
津田塾大国際関係学科	318(23)
東京学芸大生物学教室	63(12)
中央大「心理学」会	43(1)
都立商科短大商学科	144(14)
都立商科短大商学科	144(14)
武蔵工業大電子通信工学科	145(9)
文教大女子短大部	*191(14)
東京都立大物理学教室	65(6)
東京都立大化学科	91(11)
都立商科短大商学科	83(8)
津田塾大数学科	100(13)
東京農工大応用物理学科	78(16)
計　39グループ	4,357人 (435人)

（注）参加者数の（ ）内は内数で教師。＊は2泊，他は1泊。

●寄付金報告

56年5月末現在

＜一般寄付金＞

一、二〇〇円　川鉄物産株式会社
新入社員研修講師倉重俊治殿

一五、〇〇〇円　東京薬科大学新歓祭
実行委員会代表者来栖隆殿

一、五〇〇円　日本電気コストコンサルティング株式会社
幹事外崎信雄殿

＜視聴覚施設・設備充実募金＞

二〇、〇〇〇円芝浦工業大学建築学科殿

＜植樹寄付＞

けやき　三本
東海大学医学部新入生研修会殿

つばき、つつじ
東京農工大学電気工学科
鹿野快男殿

植樹資金　一〇、〇〇〇円
市光工業グループ殿

植樹資金　三、〇〇〇円
雪印乳業浅田和実殿

◆千人会……昭和56年4～5月

◇現在会員は一、六四五名です
大学人＝一、二三三名
社会人＝四一二名

◇新しく会員となられた方々
2名〔第58回報告（申込順）〕
C　早稲田大学助教授　石堂常世殿
C　お茶の水女子大学助教授　森田　明殿

◇会費ありがとうございます
56年4～5月（敬称略）
浦野伊和子、小谷正雄、渡利千波、村上千賀子、寺内礼治郎、藤木宏幸、護雅夫、川上美枝子、小泉文夫、天野正治、馬場伸也、石弘光、藤井弥太郎、辻誠、清水護、舘逸雄、瀬川美能留、佐藤慶幸、若林貞雄、柳下勇、原一雄、平田道憲、内藤博、春田素夫、林潔、林邦夫、小菅東洋、石井千尋、小原啓義、井上百合子、江渕浩美、柴田泰比古、木村尚三郎、大川郁子、中島直忠、堀野定雄、堤彪、村山松雄、村上正夫、高木健太郎、小林弘、龍池隆、岡本栄一、豊島広司、佐藤公孝、村田晴夫、辻清明、松原秀一、山元洋、石坂巌、安藤賢一、高峯一愚、岩崎英二郎、都留春夫、小泉一郎、染谷恭次郎、村田勝彦、金子六郎、石渡毅、羽田三郎、横山勝信、鈴木慎一、下森定、竹内昭夫、向山文雄、長里静子、横山定雄、清永昭次、小原清成、有賀弘、津田慶子、原治、矢野洋四郎、伊藤意智郎、海老根宏、中島康孝、北野弘久、渋谷光世、工藤康雄、桐生富久、青木清明、佐藤經明、鈴木基之、山崎邦彦、塩田庄兵衛、関根隆光、二宮永蔵、椿弘次、富塚文太郎、木村増三、伊倉退蔵、冨山芳正、木原太郎、川口弘、木島康彦、大原栄一、橋口英俊、絹川正吉、尾田綾子、高柳暁、堤辰次郎、中村英雄、加藤一郎、正田亘、梅沢文輔、矢澤大二、本明寛、関口忠、平野文彦、石堂常世、荒井献、近藤裕、佐藤和男、野間三郎、今井義夫、阪本泉、今井栄、大塚久雄、赤攝也、鈴木悌二、角田稔、北裏喜一郎、加藤秀俊、狩野紀昭、小林保彦、野見山不二、山下肇、崎田直次、手塚一郎、内田市五郎、緒田原涓一、佐野幹夫、小川仁、木村建一、芹沢栄、深海博明、関正彦、井上宇市、奥山典生、峰岸純夫、千野熊男、木村健二郎、栗田見瑞、宮本勉、三浦徳弘、近藤正夫、柴田勇造、森田明、川名明、竹村猛、以上

●寄贈図書
昭和55年12月～56年5月

「歴史と認識」「アルチュセール」　今村仁司殿
「国際会計」　染谷恭次郎殿
「実存的自由の冒険」「サルトル哲学序説」「課題としての〈文化革命〉」　竹内芳郎殿
「月の飛ぶ村」「思いがけず風の蝶」「夏から秋の光の中へ」「野守の鏡」「都市　その昏い部分」「処刑が行なわれている」　三枝和子殿
「人と日本」1、「社会学論叢」80・81、「大法論」「高齢化社会と安楽死」　笠原正成殿
「12 Aspects of Children in Japan」　日本ユネスコ協会連盟殿
「相模女子大学八十年史」　相模女子大学殿
「公法理論」1　斉藤　寿殿
「早稲田フォーラム」30・31合併号　早稲田大学総長室広報課殿
「学びへの旅立ち」　尾形　憲殿
「アイデンティティの国際政治学」　馬場伸也殿
「大学資料」76・77　文教協会殿
「金融経済」185～187、「物価史」4、「国際交流」26・27　国際交流基金殿
「政治経済史学」171～176　日本政治経済研究所殿
「エナジー」17　エッソ・スタンダード石油㈱殿
「研究論叢」18、「工学院大学研究報告」49、「工学院大学研究発表講演会・講演要旨」　工学院大学図書館殿
「Asian Culture」28～30、「Asian Book Development」1～3　ユネスコ・アジア文化センター殿
「国際協力」1～4　国際協力事業団殿
「立教」96　立教大学殿
「歴史と未来」7　東京外大・中嶋嶺雄ゼミナール殿
「大学時報」155～158　日本私立大学連盟殿
「紀要」12　日本大学精神文化研究所殿
「早稲田大学人文自然科学研究」21・18・19、「早稲田社会科学研究」21・22　早稲田大学社会科学部学会殿
「現代詩研究」300　現代詩研究所殿
「会報」91　国立大学協会殿
「ソフト・エネルギー」　太田時男殿
「愛の探究」　栗田見瑞殿
「アジアの友」11～13　アジア学生文化協会殿
「東京大学音楽部管弦楽団60年史」　飯田政之殿
「第三次南米派遣報告書」　慶応義塾大学国際医学研究会殿
「厚生補導」　文部省大学局学生課殿
「国際理性と近代倫理」柳父圀近殿
「現代社会の広告」　小林保彦殿
「町田の歴史をたどる」　町田市史編さん室殿
「二十四時間の映画」　白井佳夫殿
「ハイデッガーの思惟」川原栄峰殿
「研究所報」34　早稲田大学システム科学研究所殿
「英米文学評論」27　東京女子大学英米文学研究会殿
「現代詩研究」　現代詩研究所殿
「魂の発見」　野田　倬殿

●利用状況
＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
企業・個人・日帰り利用者を除く

■4月
（106グループ、延五、九一九人）
慶応義塾大学助教授　石坂　巌
上智大学人形劇団チロリン村
中央大学多摩シネクラブ
中央大学教授　岩尾　裕純
駒沢大学教授　石井　啓雄
専修大学助教授　竹林　代嘉
慶応義塾大学教授　松本　三郎
東京学芸大学助教授　山田　有策
青山学院大学教授　日向寺純雄
一橋大学助教授　神武庸四郎
一橋大学教授　堀部　政男
慶応義塾大学教授　川合　隆男
青山学院大学教授　羽田　三郎
成蹊大学助教授　植村　栄治
早稲田大学助教授　辻　正雄
青山学院大学教授　坂井　正広
聖心女子大学助教授　田中　順子
東海大学教授　鈴木　守
中央大学教授　森松　健介
青山学院大学教授　深沢　実
東京都立大学助教授　湯浅　欽史
早稲田大学助教授　早川　弘道
青山学院大学教授　原　豊
中央大学教授　川口　弘
中央大学教授　吉村　二郎
中央大学統計学会
成蹊大学教授　肥後　和夫
相模女子大学教授　巻　正平
杉野女子大学講師　坂口　耕史
駒沢大学講師　光岡　博美
日本大学助教授　勝山　進
神奈川大学講師　深澤　俊昭
明治大学教授　寺田　由永
明治大学講師　阪上　順夫
東京薬科大学新入生歓迎合宿
駒沢大学教授　寺中　良二
東京大学助教授　岡村　甫
東京医科歯科大学新入生校外オリエンテーション
明治大学教授　設楽　正雄
日本大学教授　石山　伍夫
筑波大学教授　小林　弥六
早稲田大学講師　深沢　実
駒沢大学講師　清水　卓
お茶の水女子大講師　林　廣子
中央大学教授　石原　忠男
国際基督教大学助手　山口　和孝
成蹊大学教授　宇野　重昭
成蹊大学助教授　深谷　昌弘
法政大学助教授　水野　節夫
東京大学教養学部文科Ⅲ類新入生歓迎合宿
東海大学医学部新入生研修会
武蔵工業大学土木工学科新入生研修会
電気通信大学短期大学部新入生合宿研修
東京農工大学農業工学科新入生オ

リエンテーション
東京都立大学助教授　坂元　忠芳
慶応義塾大学国際センター（留学生オリエンテーション・キャンプ）
神奈川大学講師　高橋　岩和
日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション
明治学院大学教授　秋山　智久
神奈川大学助教授　堀野　定雄
青山学院大学助教授　長谷川浩一
東京外国語大学教授　岩崎　力
法政大学助教授　松崎　義
駒沢大学教授　大久保治男
芝浦工業大学建築学科新入生プレゼミ合宿
国際基督教大学教授　横田　洋三
横浜国立大学教授　佐藤　精一
早稲田大学教育学科新入生オリエンテーション
明治学院大学教授　中山　弘正
中央大学教育学専攻新入生学習指導
法政大学助教授　広田　明
青山学院大学教授　佐藤　信
成蹊大学教授　福田　喜三
中央大学講師　川内　克忠
日本大学教授　北野　弘久
横浜市立大学教授　柳下　勇
学習院女子短期大学国文学科新入生ガイダンス
国際商科大学助教授　高橋　宏
都立工科短期大学機械工学科・精密機械工学科新入生オリエンテーション
東放学園専門学校新入生研修会＊＊
都立商科短期大学経営学科新入生オリエンテーション
立正大学教授　筆宝　康之
工学院大学高等学校
白百合学園高等学校修養会
大学院仏語セミナー
すみれ幼稚園
YFU日本協会

■5月

（94グループ、延五、一六三人）
東京大学教授　清水　博
工学院大学工業化学科新入生オリエンテーション
明治大学教授　石田　貞夫
東京大学助教授　鈴木　基之
東京大学教授　木村尚三郎
学習院大学教授　児玉　久雄
東京理科大学教授　富沢　稔
東洋大学教授　松本　恒之
早稲田大学助教授　東後　勝明
中央大学教授　山下　幸夫
芝浦工業大学教授　磯部　豊作
青山学院大学助教授　田村　武夫
東京大学助手　広瀬　宜郎
慶応義塾大学教授　古川　公成
国際基督教大学助手　山口　和孝
武蔵大学教授　横山　定雄
一橋大学教授　山澤　逸平
東京学芸大学幼稚園教育学科新入生オリエンテーション
早稲田大学教授　成田誠之助
学習院大学教授　河野　豊弘
東京大学教授　高橋　徹
埼玉大学助教授　町田　篤彦
東京学芸大学化学教室新入生合宿研修
東京学芸大学物理学教室新入生合宿研修
東京学芸大学理科教育教室新入生合宿研修
東京都立大学数学科新入生オリエンテーション
慶応義塾大学教授　小茂鳥和生
立教大学講師　小林　晃
東京農工大学教授　金子　六郎
東京学芸大学音楽教育学科新入生合宿研修
立教大学教授　三戸　公
慶応義塾大学教授　村井　実
津田塾大学国際関係学科フレッシュマン・キャンプ
東海大学教授　師岡　孝次
お茶の水女子大学助教授　細矢　治夫
東京学芸大学生物学教室新入生合宿研修
早稲田大学吉阪研究室ゼミ
青山学院大学教授　小林　公一
芝浦工業大学教授　高橋　清
中央大学「心理学」会
成蹊大学助教授　下斗米伸夫
東京都立大学教授　籾井　常喜
武蔵工業大学電子通信工学科新入生歓迎セミナー
青山学院大学講師　富田　功
文教大学女子短期大学部英語英文学科新入生セミナー
一橋大学助教授　滝沢　正彦
武蔵工業大学工学部教育実習セミナー
東京都立大学物理学教室新入生オリエンテーション
東京都立大学化学科新入生オリエンテーション
早稲田大学教授　大槻　健
東京都立大学教授　千葉　正士
早稲田大学講師　堀　直人
早稲田大学助教授　常田　稔
東京工業大学教授　松田　武彦
明治学院大学助教授　吉原　功
東京農工大学応用物理学科新入生オリエンテーション
津田塾大学数学教室新入生オリエンテーション
文京女子短期大学新入生オリエンテーション＊
東邦大学教授　滝本　道明
女子聖学院短大講師　浜田　辰雄
職業訓練大学校新入生セミナー
都立立川短期大学新入生歓迎セミナー
中国語研修学校
都立商科短期大学商学科新入生オリエンテーション＊＊
高津看護専門学校
桜美林大学助教授　相馬　順一
早稲田奉仕園学生会
計測自動制御学会
高橋聖書集会
東京ヴォランテヤ・コワイア
YFU日本協会
ドイツ文化センター

●編集後記

新しい年度の始まりであり、また前年度総括の時である。前年度をふりかえると、セミナー企画など、計画しながら未実現に終わった仕事もいくつかあって、深く自省するところである。と同時に、何事につけ利用者各位との連帯あればこその感をあらたにする。皆さんとの間に息の合い、息の通った仕事をと念じます。（岡山）

▼第18回大学教員懇談会

主題　大学教育のあり方
―一般教育を中心として―
期日　昭和56年9月26～27日
＜発題講演＞
東京大学名誉教授　朱牟田夏雄氏
一般教育学会会長　扇谷　尚氏
国立教育研究所長　木田　宏氏
＜発題者＞
東京工業大学教授　中條利一郎氏
東京理科大学教授　石川　孝夫氏
中央大学教授　金子　貞吉氏
文部省大学課長　斎藤　諦淳氏
＜世話人＞
大川信明、大山哲雄、河原宏、小林善彦、原口隆英、本間三郎、村上陽一郎の諸氏

▼第8回国際学生セミナー

主題　文化接触と日本
――移入と創造――
期日　10月30日～11月1日
＜ゲスト講演＞
模倣と創造のあいだ
学習院大学教授　加藤秀俊氏
＜セクション演習＞
A欧米派遣留学生と明治維新（上垣外憲一氏）／B対外交渉にみる日本の特性（横田洋三氏）／C生命・情報・文化そして科学（道家達将氏、熊田禎宣氏）／D日本の経済と経営の風土（緒田原涓一氏）／E内発的創造性（村井吉敬氏）
＜運営委員＞
上智大学教授　三輪公忠氏

▼第115回大学共同セミナー

主題　現代人と沈黙
期日　11月13～15日
＜全体講義＞
東京大学名誉教授　中村　元氏
＜ゲスト講演＞
東の信仰と西の信仰のはざま
臨済宗円覚寺派松嶺院住職　輿　俊哲氏
＜講話＞
国際基督教大学長　中川秀恭氏
＜セクション演習＞
A神秘主義と沈黙（峰島旭雄氏）／B大衆意識における沈黙の構造（堀江湛氏）／C現代政治における沈黙の意味（岡野加穂留氏）／D極域における人間存在―沈黙と有弁（芳野赳夫氏）